

山内賢之丞通喜（八坂村出身）の遺髪墓

シリーズの1回目として八坂出身の山内賢之丞通喜（やまのうちけんのじょうみちよし）の話をしましょう。天保13年（1842年）4月18日、長州藩士として彼は八坂村に生まれます。優秀だったのでしょうか、藩主毛利慶親（敬親）の参勤交代の供に加えられ江戸に行ったり、長州軍艦壬戌丸（じんじゅつまる）乗船を命ぜられたり、兵学者大村益次郎に蘭学を学んだりと将来が嘱望されていました。ところが「花燃ゆ」で分かるように、幕末、国の様子が急変します。多くの外国船が日本の周りを徘徊するのです。当然、国を守らなければなりません。しかし当時の幕府には、全国の海岸線を守る能力はありません。そこで各大名に自分の藩を守るよう命じます。それは、鎖国中は決して認めなかった大砲と大型船を造ることを各藩に認める大転換でした。そうした時代の中で事件は起こったのです。

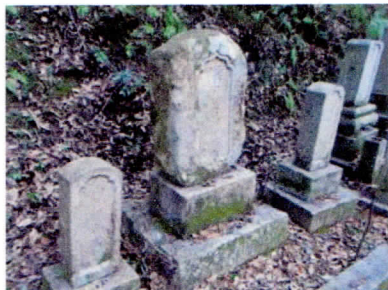


占領された下関前田砲台

文久3年（1863年）のことです。国内は、「攘夷（じょうい）」（外国を打ち払え）とナショナリズムに沸き立っています。受けて幕府は、全国の藩に外国船を討つよう命じます。5月10日のこと、長州藩は満を持して下関海峡を通過する外国船に砲撃を始めました。これが下関戦争です。

ところが幕府の命に従ったのは長州藩のみでした。この戦いで藩は西欧列国の強力な軍事力を目の当たりにします。6月5日、仏国軍艦は前田砲台を激しく攻撃します。この時、山内賢之丞通喜は前田砲台の警備を命じられていました。長州砲を使い照準を合わせようとした瞬間に、仏国軍艦の砲弾を頭に受けて戦死した（享年22才）のです。

明治の時代を迎える幕末の約17年間で、長州からは1447名の殉難者を出しますが、この初めての戦死者が八坂村出身の山内賢之丞通喜でした。彼は今、下関の桜山神社招魂場に吉田松陰、高杉晋作の横、最前列に祭られています。また、彼の遺髪は出身地下八坂の「横野」バス停近くの山裾で静かに眠っています。下関戦争では、他にも徳地出身者が戦った様子が記録に残っています。



山内賢之丞通喜の遺髪墓